

巻頭言

『ソーシャルワーク研究』という雑誌の名

編集委員一同

『ソーシャルワーク研究』という雑誌名が消えてなくなるのではないかと危ぶまれたが、なんとか危機を乗り越えて、新しい出版社の許で再出発することになった。廃刊の憂き目をみずに名前だけでも残すことができて、リニューアル発刊できることは望外の喜びでもある。快く継続出版の英断をしてくださった中央法規出版には心からお礼を申し上げるほかになす術がない。この巻頭言にはふさわしくないかもしれないが、愛読者や原稿を執筆してくださった方々や関係者の皆さんともども感謝に堪えない想いを伝えておきたい。

およそ半世紀続いた旧『ソーシャルワーク研究』が新しい装いで、これからどのような新企画を誕生させるのか、読者の皆さんには、時代が求めるソーシャルワークを情熱的に語り継いでもらえるようにと期待をふくらませている。と言いつつも、「ソーシャルワーク」という専門用語は定着したのだろうか、市民にひろく知れわたり、愛されるものになっているのだろうか、ふと不安がよぎることもある。社会福祉関係者の間ではソーシャルワークも市民権をえた学術的かつ実践的な用語として馴染んできているとは思われるが、はたして一般庶民の間ではいかがなものだろう。あいかわらず外来語として舶来もの扱いされているのだろうか。たしかに「ソーシャルワーク」という言葉は、戦後の日本社会に遅れて入ってきた専門用語であるし、いまだに違和感が残ってしまうのもいぬめない。

ソーシャルワーク思想を戦後日本社会に導入した当初は、慈善事業や博愛事業に代わる「社会事業」に近いものとして受け止めようとしたのかもしれない。ソーシャルワークは専門職大学院を修了したソーシャルワーカーが取り組む専門的援助行為で旧来の日本型社会事業とは異なるもので、「ソーシャルワーク」は「専門社会事業」とであると定義した研究者も存在したくらいである。戦後に短期大学の形態で創設された日本社会事業短期大学や大阪社会事業短期大学も、アメリカ合衆国の2年制専門職大学院を模して導入されたものと耳にした記憶がある。最近では専門職大学院として大学院大学を呼称するくらいはあるが、その後、福祉系短期大学も時代の波に乗って4年制大学に移行し、日本社会事業大学を除いて、大学においても社会事業が社会福祉に名称変更していった経緯がある。

ソーシャルワークは、そもそも民主的な市民社会を存立させる要件として自己決定できる市民を理念として想定している。自己実現や自己選択が人間社会の権利であり尊厳であるという市民文化が膾炙していなければ、ソーシャルワークの必要性は市民にも認識されにくい。主体性を尊重する徹底した個人主義が付度されにくい日本社会では、ゆがんだ自己責任論や家族責任論に流されやすく、限りなく意思決定の支援を追い求めるソーシャルワークは、日本社会に必要な不可欠な援助だと思う。ソーシャルワークの援助や支援は、生活困窮や孤立・孤独に向き合う数少ないヒューマンサービスのひとつだと考えられるが、生活資源の提供であれ、人間関係のつながり創出であっても、当事者の自己選択できる生活力の回復・向上をめざしている。その意味でもソーシャルワークの名称をまだ消すことはできない。